

とある街にて停泊中の
グランサイファー

『みんな各々街を見てまわってるし
ボクはお昼寝でもしてようかな』

『こんにちはお嬢ちゃん』

『うっ？』

『お嬢ちゃん、騎空団の人でしょう？』

『ふえ？ そうだよ』

『やっぱりそうだね
今キャンペーン中でね
お疲れの騎空団の人たちに
マッサージをして回ってるんだ』

『マッサージ？
え、でもボク
お金ないよ』

『ハハハ、大丈夫
初回はお試しということぞ
無料なんだよ』

『そっかあ、それなら
時間あるしちよつとだけ……』

『マッサージはどうかかな?』

『んっ……えと、
こういうのはじめてだから
ボクよくわからない……な……
ちよっとだけ気持ちよくなってきた、かも……』

びくんっ

びくんっ

『長い旅できっとこっってるんだろぅね
慣れてくるともっと気持ちよくなるからね』

『うっ……うん』

ぱちゅっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ

ぱちゅっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ

『よおし、仕上げだ』

『スゥゥゥ……!!』

んおおっ
るるるるる
るるるるる

んんんんん
んんんんん

んんんんん
んんんんん

んんんんん
んんんんん

んんんんん
んんんんん

『うっ……なんかっ
ドクンッドクンッしてるっ』



『おほ〜♡
たっぷり射精たあ〜
気持ちよかった?』

『う、うん、気持ちよかった?
のかな……
おまたが変、なんか出てる……』

『これはマッサージがよく効く
おくすりみたいなものだよ
いっぱい塗り込んでおこうね』

ホッ
ホッ

しゅん
しゅん

『また来たかったら
次からは500ルピ持ってきてね』

『え、あ、うん……』

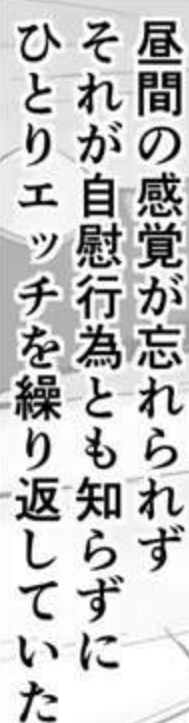
しゅん

しゅん
しゅん

しゅん

ポコポコ

カクカク



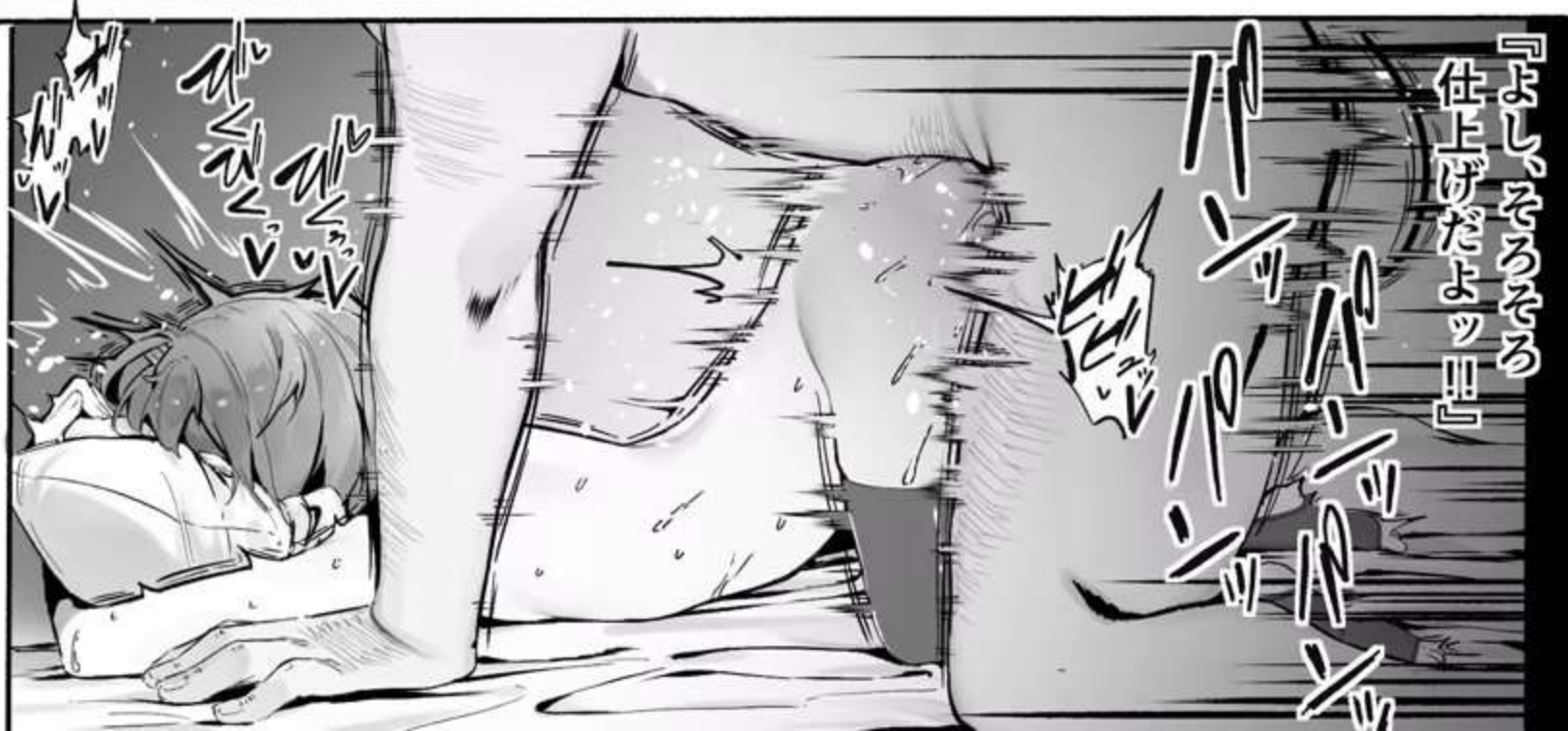


『いやあまさか
本当に来てくれるとはねえ』

『な、なんか……
あれからずっと
おまたが変で……
自分のマッサージじゃ
全然たりなくて……』



『あ、あの……今日、
もう一回マッサージいいですか』



『よし、そろそろ
仕上げだよ!!』

『ほんと追加料金
なんだけど特別だよ?』

『それから数日、我慢ができない時は
マッサージに通う日々が続いていた』



お金が足りず、団の資金に
手を付けてしまうことも少くない

そんな生活が2週間を
過ぎようとしていたある日





むはあ...



『おおじさん.....
ちよっと相談があるんだけど』

『ふん...たん...ふん...』



『まあまた立ち寄った時にでも
我慢できないようだったら来たらいいよ』

『う、うん.....
(やだやだ、もっと
マッサージしたい.....)』



『ボク、もうそろそろこの島を
出なくちゃいけないみたいで.....』

『あらら、残念だねせっかく
マッサージにも慣れてきたのだね』

『そ、そうなんだよね.....』

あれから1週間
マッサージは自分でするようにして
我慢をしていたが



何気ない動作で
へんな気持ちになり
部屋にこもることが多くなっていた

くちゅ♡
くちゅ♡
くちゅ♡
くちゅ♡

ヤッ♡
ヤッ♡
ヤッ♡



『ア○チラ、最近調子悪そうだけど大丈夫か?』



『え、あ、ああうん!大丈夫だよ!ちよっと食欲ないかなって』

『そ、そうかあんまり無理するなよ』



『ちよっとア○チラちゃん!?大丈夫ですか!だれかっ!!』

うっ...

うっ...

ガッ

『(ダメだ……体調がどんどん悪くなってるマッサージ、行かなきゃ……でもお金……)』



『ごめんなさい♡ごめんなさい♡
マッサーヅ♡♡あの♡
その♡♡たりなく♡♡♡』

『あらら、こんなになつて
お金は持ってきたかな?』

『うん♡うん♡♡
だんちよの♡♡
だけど♡おかね♡ある♡♡』

『わるい子だね
たっぷりかわいがってあげるから
おはいり』



『おねがいしましゅ♡
おねがいしましゅ♡♡
おくう♡おくまれっ♡
マツサーボ！んっ♡やっ♡』





およそ100万あまりを支払い
都合のいいオナホールとなった
ア○チラ



一方その頃船では
消えた彼女の
捜索がはじまっていた



その足取りは
つかめないまま
数ヶ月が過ぎた――

